

柊真太郎は勇者になる

シンコウイチロウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年には、「勇者になりたい」という夢があった。

目次

はじまりはじまり	1
白菊の章	
ひいらぎしんたろう	7
であい	12

はじまりはじまり

——むかしむかし、あるところに勇者がいました。

この物語は、そんな一文から幕を開ける。

???

パリリ、と。

少年は、絵本をめくる。

開かれた大きなページには、魔王に立ち向かう勇者の絵が描かれていた。

そのページを読み、次のページをめくる。

やがて全部のページをめくり、絵本を読み終えると、少年は最初のページをめくり、絵本をはじめから読み始めた。

絵本のタイトルは、『ぼくはゆうしや』

神様選ばれ、勇者となった一人の少年が、魔王に苦しめられる人々とさらわれた姫君を救うため、冒険の旅に出るといってお話。

少年は、このお話が大好きだった。

絵はきれいだし、勇者はかっこいいし、なにより読むだけで勇気が湧いてくるからだ。微塵もあきることなく、少年はこの絵本を何度も何度も繰り返し読んだ。

他の何もかもを忘れて、この絵本の中の世界に入り込む時間が、少年にとっての数少ない楽しみだった。

本をめくり続け、最後のページにたどりついたため、再び最初のページを開こうとしたときだった。

「なによんでんだよー！」

突然前から伸びた手が、絵本を奪い取った。びっくりして顔を上げる。

目の前に立っていたのは、いつも少年に嫌がらせをしてくるいじめっこだった。少年は心の中で『ジャイアン』と呼んでいる。とりまきである男子たちの姿もあった。

「あ、か、かえして……いー！」

慌てて絵本を取り返そうとする。

必死に手を伸ばすが、体の大きさも力も『ジャイアン』のほうが上だった。

高く掲げられた絵本に、少年の手は届かない。

『ジャイアン』の片手に、ドンと身体を一押しされる。少年はいともたやすく後ろに転がされてしまった。

にやにやと嘲笑ってくるいじめっこたち。悔しくて悔しくて、涙が出そうになる。そのときだった。

「よわいものいじめはだめだよ！」

そうやって現れたのは、一人の女の子だった。

外見からすると歳は多分、少年と同じ。

鮮やかな赤い色の短い髪をなびかせ、小さな両手を左右にひろげて、少年を守るようにいじめっこたちの前に立っていた。

女の子は、「ひとからものをとるのはいけないんだよ！」とか「じぶんがされていやなことをひとにしちやだめだよ！」とか言つて、『ジャイアン』を説得しているらしかった。

しかし言葉は届かず、『ジャイアン』は女の子に襲いかかる。すると、女の子は右拳を構え、『ジャイアン』に向けてまっすぐ突き出した。

「ゆうしゃ、パーンチ！」

女の子のパンチが、『ジャイアン』の大きな体を吹き飛ばし、後ろに転倒させた。

自分より弱そうな相手に負けるとは思っていなかった『ジャイアン』は、立ち上がる
と「おぼえてろー！」と叫びながら逃げ出す。とりまきたちも追いかけるように去って
行った。

ぼかん、と呆ける少年。

女の子は「もういじめちゃだめだからねー！」と叫んだ後、『ジャイアン』が落として
いった絵本を拾い、少年に差し出した。

「はい！ きみのえほん！」

その女の子は、人なつっこい笑みで言った。

「わたし、！ よろしくね！」

絵本を開く。

悪い魔王と聖なる剣を振るう勇者の絵が描かれたページの文を、少年は読んだ。

「ながいながいたびのすえ、勇者はついに魔王のしろにたどりついたのです。」

『やい、魔王！ よわいものいじめは止めるんだ！』

「勇者、かっこいいね！」

少年の隣には、いじめっこから助けてくれた女の子がいた。

彼女の言葉に、少年は顔を赤らめながら頷く。

女の子が言うとおりに、勇者はかっこよかった。

火を噴く恐ろしいドラゴンを倒してしまいうくらい強くて、弱い誰かに迷いなく手を差しのべるくらい優しく、自分より強い相手だろうと立ち向かえるくらい勇ましい。

そんな勇者に、少年はどうしようもなく憧れていて。

「ぼくも……勇者になりたい」

気がつけば、自分の口がそう言っていた。

それが、少年のたった一つの夢だった。

だけど、勇者になるのは途方もないくらい難しく。

クラスのみんなからはゲラゲラと笑われて、「なれるわけないだろう！」とばかにされた。

嫌な思い出に唇を噛む少年に。

少年の言葉を聞いていた女の子は。

「すてきなゆめだね！」

花がほころぶような笑顔でそう言った。

少年は思わずきよんととして、女の子に聞く。

「……わからないの？」

「わからないよっ！」

「……ぼくになれるわけない、ってばかにしないの？」

「ばかにしないよ！」

嘘偽りのない、透き通るような目をこちらに向けて、女の子は言った。

「なれるよ！ あきらめなければ、きつとなれる！」

???

かつて人類は、神の怒りを買った。

土地を奪われ、築き上げたものを壊され、すべてを焼き尽くされた。

絶望の危機に追いやられた人類は、小さな極東の国の小さな島国に逃げ延びた。

そして、壁に囲われたその最後の土地で、永い年月を生きた。

これより語られるのは――。

神に選ばれ、運命を背負った、無垢なる少女たちと。

強くて優しくてかっこいい、そんな勇者になりたいと夢見る、一人の少年の。

勇気と友情の物語。

奪われ、傷つき、それでもなお戦い続けた、勇者の物語。

はじまりはじまり。

白菊の章

ひいらぎしんたろう

——近頃、よく考えることがある。

自分は将来なにになるのだろうか、と。

???

「えー明日の道徳の授業だが、皆には将来の夢について作文を書いてもらう」

団栗坂小学校6年1組の教室。

教壇に立つ中年男性の担任の先生がそう言うと、生徒たちが「ええ〜!」とブーイングを上げた。そりゃそうだろう、と思う。自分——柗真太郎も、作文を書くのはあまり得意じゃない。

顔をしかめる生徒たちに対して、先生は苦笑いを浮かべながら言葉を続けた。

「君たちは、将来のことなんてまだずつと先だと思っっているだろう。だが、時間の流れは遅いようで早いものだ。油断していたら、一年、十年なんてあっという間に過ぎていく。

現に、君たちはもう小学6年生だ。そして来年は中学生になる。早いうちに自分が何をしたいか、何になりたいかを確認してほしいと思つてな。

明日までに書く内容を考えてくること。わかつたかね？」

先生の言葉に、「はい」と答える生徒たち。

キーンコーンカーンコーン、と学校のチャイムが鳴り響いた。

「それじゃあ、今日はここまで。日直の対馬くん」

「起立」

日直の号令がかかり、生徒たちが席を立つ。

「礼」

頭を下げる。

「神樹様に、拝」

廊下の方を向いて、手を合わせる。

「はい、さようなら。帰りは気を付けるように」

『さようならー』

そして、先生に挨拶をして、下校となる。

こうして今日もまた、学校が終わりを告げた。

「ただいまー」

真太郎の自宅である一軒家は、団栗坂小学校から歩いて十五分ほどの場所に建っている。

玄関に入りながらそう言うと、すぐに「おかえりー」と返事が聞こえてきた。

廊下からリビングを覗くと、母親——柘真由美が座椅子に座りながら、テレビでドラマを見ていた。

父親——柘大輔の姿はない。父は市役所勤めの公務員だ。今頃は仕事だろう。

「お母さん、今日の晩ご飯なに？」

「今日のはあんたの好きなハンバーグ。ほら、さっさと手洗いうがいしてきなさい」

「うん」と頷いた真太郎は言われた通りに洗面所に向かうと、鏡の前で手洗いうがいを済ませる。

それから二階に上がって自室に入ると、ランドセルを床に置き、ベッドの上に大の字になりながら仰向けに倒れた。ぼふっ、と布団が弾む。

「はあ……」

自ずと口から小さなため息が漏れる。原因はもちろん、作文に書く内容だ。

「将来の夢、か……」

外はすでに日が沈んでおり、部屋の中は薄暗い。

チツ、チツ、と目覚まし時計が黙々と秒針を刻んでいる。

何十秒かぼーつとしていた真太郎はふと起き上がると、部屋の隅に配置された本棚へと足を向けた。

コミックや雑誌、ゲームソフトなどが収納されているその中から、一冊の薄い絵本を取り出す。

可愛らしくも幻想的なタッチで拍子に描かれているのは、装備した剣を高々に掲げる勇者の男の子。

タイトルは、『ぼくはゆうしゃ』。

——なれるよ！ あきらめなければ、きつとなれる！

この絵本を見るたびに、そう言ってくれた少女の姿が朧げに脳裏に浮かんでくる。桜を彷彿とさせる、華やかな笑顔の女の子。

彼女の言葉はとても暖かくて、思い返すだけで心の底から勇気が湧いてくるのを感じることができた。

でも——

「はあ……」

再びため息をつき、ベッドの上に寝転がる。

——終真太郎は、『勇者』になりたい。

人々を助け、魔王を倒し、世界を救った勇者。

その姿があまりにもかっこよくて、気が付けばどうしようもなく憧れていた。

今だって、真太郎はなりたいと思っている。幼い頃から憧れていた『勇者』に。

——だけど、憧れたその存在はあまりにも非現実的で、夢を叶えるには真太郎はあまりにも無力だった。

憧れを抱くなかで、胸の奥底に潜むもう一人の自分が言うのだ。——お前には無理だ、と。

なれないという理解と、なりたいという願望。この二つに挟まれ、心が重たくなる。

「僕は、どうしたら……」

ぼつり、と小さな言葉が口から転がる。

真太郎の疑問に、答えてくれるものはいなかった。

であい

(結局、何も思いつかなかったなあ……)

朝の通学路を歩きながら、真太郎はため息を一つ吐いた。

悩みの種はもちろん、今日の授業で書くことになる作文の内容。

自分の将来の夢はなんなのか。昨晩からずっと考えてはいるものの、『勇者』以外にないものなんてちっとも思い浮かばない。

だからといって、「僕は将来、勇者になりたいです」なんて馬鹿正直に書くわけにもいかない。書けば間違いなく先生からダメ出しされる羽目になるし、もしみんなの前で発表しなきゃなんて言われたら目も当てられない。

幸い、今日の道徳の授業は6時間目。考える時間は十分残っているが……。

「最悪、将来の夢はありませんって書くしかないかなあ……」

それはそれで怒られそうだと、思いながら再びため息をつこうとして。

「ん？」

コツン、と。

自分の履いている靴が、何かを軽く蹴った。

足元に視線を下ろす。

一個の腕時計が、道の上に転がっているのが見えた。

しやがみ、右手それを拾い上げる。

丸い文字盤を囲う黒いベゼルと、黒いベルト。文字盤に刻まれた、『㊦』から『㊦』までの数字。

ちよつと変わったデザインとその腕時計には時針と分針の二本の針があるが、電池が入っていないのか二本とも『㊦』を指したまま動いていない。

(誰かの落とし物かな)

落とし物なら交番に届けるべきだが、今は学校に向かう途中だし、この近くに交番はない。

学校が終わったらすぐに交番にいこう、と決めながら、真太郎は腕時計をズボンの左ポケットに入れようとする。

ポケットの口を広げた左手に、腕時計のベルトが触れた時だった。

次の瞬間、バチンツと音をたてて、腕時計がひとりでに左手首に巻き付いた。

「うわっ!?! なんだこれ!?!」

驚き、咄嗟に取り外そうとする。

しかし、外れない。ベルトを引っ張っても、腕をぶんぶん振っても、腕時計は手首か

ら離れる気配すらなかった。

まるで、ぴったりとくっついてしまったかのように。

「どうしよう……」

朝日に照らされる路上で、真太郎は呆然と呟いた。

団栗坂小学校6年1組の教室。

真太郎の席は、窓側の列の前から2番目の位置にある。

正面の黒板から視線を左に移せば、窓越しに見えるのは青い海と、その上に架かる巨大な橋——瀬戸大橋だ。

真太郎が生まれ育った四国と、四国の外の土地——本州を繋ぐ交通の要所。

もつとも、四国と本州の交通が途絶された今となつては、橋としての機能を失ってしまっているが。

「……………」

窓の外を眺めていた真太郎は、視線を自身の左手に移す。

手首には、今朝拾った腕時計がいまだに嵌っていた。

(なんなんだ、これ……)

勝手に巻き付いたうえに取り外せない、不気味な腕時計。

もしや、一度つけたら二度と外せない呪いの腕時計とかじゃ？　なんて馬鹿げた考えが浮かんでくる。

とここで、学校のチャイムが鳴り響いた。

「こら君たち、席に着きたまえ。朝礼を始めるぞ」

教室に担任の先生が入り、クラスメイトたちがそれぞれの席に座っていく。

全員が着席し終えると、今日の日直が号令をかけた。

「起立」

席を立つ。

「礼」

頭を下げる。

「神樹様に、拝」

廊下の方を向いて、手をあわせる。

『神樹様のおかげで今日の私たちがあります』

そして、感謝の言葉を神樹様に捧げる。

いつもの朝の挨拶を終え、真太郎は自分の椅子に座ろうとする。

その瞬間、全ての時が停まった。

「…………え？」

真太郎が異常に気付いたのは、着席した直後だった。

周囲を見回す。

クラスメートたち全員が、立ったままの状態で停止していた。

教壇に立つ先生も、こちらを向いた体勢のまま動かない。

見れば、黒板の上に掛かった時計の針も、ピタリと停まっていた。

「なんだ、これ…………!？」

混乱に襲われながら、真太郎は教室を飛び出し、廊下を走った。

他の教室も同じだった。先生と生徒たちが、一人残らず静止している。

階段を駆け下り、上履きのまま校庭に出る。

広い砂の地面の上に立ち止まり、両膝に手をつけて荒くなった息を整える。

音一つ聞こえなかった。

風に揺れる木々のざわめきも、小鳥の囀りも。

全てが完全に停止し、しんと静まり返っている。

——真太郎を除いて。

「なんなんだよ、一体…………なにが起こって…………!？」

理解の範疇を超えた異常事態。

いまだに整わない呼吸とともに、疑問を口にしたその直後。

チリン、という音が聞こえてきた。

「……？」

一瞬、気のせいかと思ひながら耳を澄ませる。

チリン、という音がまた聞こえてきた。

風を彷彿とさせる、涼やかな音色。

風鈴の音色だと、すぐにわかった。

音はまだ鳴り続けている。

チリン、チリン――

チリン、チリン、チリン――

チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、

チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、

チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、

チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、

チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、チリン、

チリン――

どこからともなく聞こえてくる、無数の風鈴の音。

まるでなにかに対する警鐘のように、ひっきりなしに鳴り響いている。

(この音……もしかして海の方から?)

確か、瀬戸大橋には数えきれないほどの風鈴が吊るされてあつたはず。そう思いながら後ろを振り返ったその瞬間。

視界が、極彩色の光に包まれた。

「う、ん……?」

数秒の無音の後。

視界が光に包まれる寸前、両腕で顔を覆いながら目をつむった真太郎は、おそるおそる瞼を開く。

そして、目の前の光景に、思考を完全に停止させた。

世界が、一変していた。

端的にいえば、それは樹木の世界だった。

色とりどりの無数の樹木が、地面を覆いつくしている。

左右に立ち並ぶのは巨大な柱。頭上を見上げれば、不思議な色の空が広がっている。絵本の中に入ってしまったのかと錯覚するほどに、あまりにも幻想的な世界。

その樹木のうちの一本の上に立ちすくみながら、真太郎は唾然としていた。

「じいだ、ハハハ……う。」

呆けた声をこぼしながら、後ろを振り返る。

そして視界に——何かが映った。

饅頭のような形状をした白い体。

多数の分厚い歯を有した、巨大な口のような器官。

人よりもはるかに巨大なその何かは空中を浮遊しながら——こっちめがけて泳いでいる。

——やばい。

直感でそう思った。

あれが何なのかはわからない。

生物なのか、そうでないのかすらわからない。

ただひとつわかることは。

あの『化け物』は、真太郎を殺そうとしているということだ。

「う、あ——」

自ずと足が動き、後ずさるが、白い異形は予想以上に動きが早かった。あつという間に真太郎の目の前まで接近し、巨大な口をガパリと開く。洞窟のような暗い口の中に、真太郎の体はあっけなく？み込まれ——

「危なあああああああああい！」

暗雲を吹き飛ばすような、明朗快活な声。

それが響き渡った直後、真太郎を食らおうとした白い異形は塵となって爆散し、跡形もなく消え去った。

へたり、と真太郎は尻もちをつく。

(生き、てる……?)

呆然とする真太郎の目の前には、3人の少女が立っていた。

「ねえ君、大丈夫!? どっか怪我してない!？」

「ぎりぎり間にあつたみたいだね。よかつた〜」

「ええ、でもどうして樹海に男の人が……?」

一人は、情熱の花のごとき、赤い衣装の少女。

一人は、優雅な花のごとき、紫の衣装の少女。

一人は、清楚な花のごとき、白い衣装の少女。

花を彷彿とさせる、神秘的な衣装を纏った少女たち。

これが、柗真太郎と、『勇者』と呼ばれる少女たちの出会いだった。